

比較文學研究

巻頭言：文明へ……………竹内 信夫（1）
ルネサンスと日本人……………平川 祐弘（4）

実存の幾何学——ミラン・クンデラと音楽……………黒田 愛（14）
壯年期の内村鑑三に於ける諸問題
——日本の近代の曲がり角で……………坂本 兵部（33）
小説と洋琴——内田魯庵における文学の風刺……………森田 直子（55）
漱石文学と植民地——大陸へ行く冒険者像……………西原 大輔（70）
大正文学の陰影——張資平の恋愛小説と田山花袋……………張 競（87）

『徒然草』における文末の反復とヴァリエーション……………渡辺 邦男（108）

【書評】

A Fantastic Journey: The Life and Literature of Lafcadio Hearn (P. Murray)……………ジョージ・ヒューズ（田村義也訳）（115）
『世紀末と漱石』（尹相仁）……………稲賀 繁美（129）
『漱石と魯迅の比較文学研究』（林叢）……………西原 大輔（137）
『異文化を生きた人々』（平川祐弘編）……………鈴木 禎宏（140）
『近代日本の翻訳文化』（亀井俊介編）……………金澤 英之（145）
『世界の中のラフカディオ・ハーン』（平川祐弘編）……………小沢 自然（148）

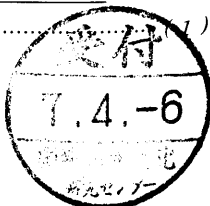
【Le Rond-Point】

森亮先生のこと……………平川 祐弘（152）
中村都史子氏「日本のイブセン現象・1906-1916」
論文審査の結果の要旨……………小堀桂一郎（154）
博士學位論文公開審査余滴……………大谷幸太郎（157）
新田義之氏「R・ヴィルヘルムと中國」論文審査の結果の要旨……………小堀桂一郎（160）
福田真人氏「近代日本における結核の文化史」論文審査の結果
の要旨……………小堀桂一郎（162）
福田真人氏博士論文審査傍聴記……………成 惠卿（165）
1994年度八王子セミナーに参加して……………稲賀 繁美（167）
神野志隆光氏講演会「神話の思想史」傍聴記……………前島 志保（173）
内野儀氏講演会「比較演劇学の試み」傍聴記……………鈴木 禎宏（175）
「壁なき大学」発足始末——あらたな欧亜学術交流にむけて……………稲賀 繁美（176）
北米で日本文学を教えたい方へ……………榊 敦子（179）

外国語要約……………（1）

66

東大比較文學會



部会の設定が承認され、今後早急にその具体的な活動計画を実行に移す段取りとなった。

沿革を述べる。トランスキョルチュラ財団は当初ヨーロッパ共同体傘下の国際機関として一九八七年に発足した。ベルギーの都市ルーヴァン・ラ・ヌーヴでの国際学会を皮切りとして(八七年および八九年)、以下ボロニーヤ(八八年)、フイレンツェ(九〇年)、広東、サンチャゴ・デ・コンポステラ(九一年)、シカゴ(九二年)など、毎年世界各地で、文明相互の認識と誤解に関する個別のテーマを選び、地道な国際的会合を開催してきた(最初の会議の報告書は仏文『認識と相互性』(八八年)として、また広東の報告書は『獅在華夏——文化双向認識的策略問題』(九三年)として公表されている。(注))

その活動の特色は、欧米のみならずアフリカ、アジアの比較的若手の研究者を、国籍や専門領域を越えて縦横に招聘するネットワーク作りにある。それは通常公認の学術的国際交流に対する反発・抵抗の現れである。学術用語による一見物分かりのよい無色透明な流通回路が成立すると、文化的な障壁はかえって抑圧され隠蔽されてしまう。「前学問的」として切り捨てられるこれらの要素に、我々は

当初から一貫して拘わり続けてきた。

その出発点にあるのは、会長アラン・ル・ピションによれば「相互人類学」の理念である。ヨーロッパ側が非ヨーロッパ世界を人類的見地から研究するのは当然とされながら、逆に非ヨーロッパの視点からヨーロッパを観察する立場には、これまで一方的に非学問的という烙印を押しされることが多かった。こうした偏りはつとにレヴィ・ストロースにおいても意識されてはいる。だが、それなら反対に第三世界の側から先進諸国をみた「逆しまの人類学」を打ち立てれば、それで問題は解決するだろうか。エドワード・サイードも指摘するように、それは学問世界を政治的覇権争いへと逆行・後退させるだけだろう。

例えば日本学の現状を考えてもよい。アメリカ合衆国の若手日本学者は、自国に蓄積された業績の消化と自分の業績づくりとに追われて、もはや日本の学術出版に目を通す余裕はない。フランスの東洋学者は世の中に日本人学者さえいなければ自分たちはどんなにしあわせなことだろうかと嘆く(これはナボコフを教授に招く話もちあがったときに、あれは作家だが教授ではない、誰が象に象のことを尋ねるかね、とのたまった御仁と同様

「壁なき大学」発足始末

——あらたな欧亜学術交流にむけて

稲賀繁美

「壁なき大学」その創設が、一九九三年六月二十一日には北京で、追って二十三日にはマカオにおいて宣言された。東西文化のあいだにはたして万里の長城は必要か。シルク・ロードの伝統をいま一度学術交流の水準で比喩として吟味する必要があるのではないか。そうしたいささか詩的といつてよい発議が、ヨーロッパにその本拠を置く TRANSCULTURA財団から発せられ、これに北京大学、廣州中山大学、澳門大学などの関係者が応答し、ユネスコ、北京のイタリア大使館、フランス大使館、マカオ政府などの後援も得て、今回の会合実現の運びとなった。閉会に臨んで採択された五年計画プロジェクト、「壁なき大学」網については、筆者を含む国際的な作業

の理論である)。そして当の日本人学者たちはいともかわらず日本でしか通用しない訓古学・考証学に埋没している……。

などといつてはいささか戯画が過ぎようが、中国における今日の哲学研究などは、かつてボルヘスが語った奇怪なる「中国の百科事典」を地で行く存在となってきた。まず、中国における哲学の範疇も思考形態も欧米の伝統とは相容れず、ヨーロッパ側の現代哲学者からは相手にされない。おまけに西欧の東洋学者たちはもっぱら古典研究に勤しみ、中国における西洋哲学研究には興味を示さない。欧米の専門学界の枠組みで中国哲学を論じる中国人学者は中国本土では売国奴的変節者と見なされかねない。こうした三重の擦れ違いもあって、異なった学問伝統相互のパラダイムの互換性は、学者の層が(数量的に)厚くなり、裾野が広がるに従って、かえって徐々に、しかし確実に失われつつあるようなのだ。

このように、国際交流、国際理解が叫ばれながら、その地道な手続きとなると、かたや欧米学界・言語中心主義が、それとも逆向きの地元文化至上主義かの不毛な選択から、われわれは一步も先に進んでいないことが明らかになる。仲介役を果たす有能な通訳たちは、

有能であればあるほど黒子に徹し、その頭脳のなかで時々刻々発生しているであろう文化間の葛藤は、おめてたい手打ち式の異文化交流議事録からは、気付かれもしないで脱落し消え去ってゆく。通訳が有能なほど、本来問われるべき問題はかえって不問に付されて素通りしていつてしまうのだ。

となれば文化間の誤解を性急に解消する代わりに、むしろその摩擦を一種の空気抵抗と考えて、そこに翼を浮かべる工夫が必要となる。材料には事欠かない。仏教の伝播・翻訳事業から、唐代以来のキリスト教の東漸、国際都市長安に全世界から集まる留学生。普通言語を求めてのアタナシウス・キルヒヤーの「幻想の東洋」からヴォルテールの中国像、イエズス会士の活躍と典礼論争、「天」の概念。そして植民地主義戦争を背景とした「革命」思想の中国移入の命運に至るまで。理解と誤解が背中合せて進行した東西交渉の事例が縦横に検証されよう。作家王孟も言うように、非中国人拒絶の印だった万里の長城は、いまでは外国人供給のための受け入れ施設と「誤解」されている。

林則徐がアヘンを投棄した廣州沿岸の現場や海防の砦の跡から、北京はアダム・シヤーを許さぬ。世界一裕福と思われている国からの唯一の参加者でありながら、将来の会合開催ひとつ確約できぬ居心地の悪さは、日本国国家公務員としていわでもの繰り言だろう。せめて、この小文に接して、「壁なき大学」への協賛を表明される同志の現れることを、心から希求するばかりである。

(註) Institut Transculturata (ed), *Commissance* et *réciprocité*, Louvain-La-Neuve, Ed. CHIACO, 1988; 王賓、阿讓・熱・比松(主編)『獅在華夏——文化双向認識的策略問題』中山大學出版社、一九九三。なお Alain le Pichon, *Le Regard inégal*, éditions Jean-Claude Lattes, 1991 に学会活動の沿革が詳述されている。本文に触れた移動学会については、既にウーベルト・エーコやフリオ・コロンボがイタリアの新聞に記事を寄せており、筆者もさらに詳しい報告を別途発表の予定であるが、目下のところ日本語、フランス語ともに出版の目処がたっていない。

ルの天測壇、マテオ・リッチの墓、さらには中葡文化の接点マカオに至るまで。西安の慈恩寺大雁塔、清真寺境内、石林のネストリス派流行の碑文、さらには西の方、万里の長城を鉄道が横切る嘉峪関の跡、敦煌・莫高窟陽関を越えてはトルファン、葡萄の谷、『西遊記』火山山や広大な高昌城跡を巡る旅。そのあいまあいまに東西交渉史上のトピスを歌枕に移動学会を催したわれわれは、三週間の旅の間にはすっかり当初の外交官のお愛想をかなぐり捨てて、地金の付き合いをするようになつていた。もはや何が公式の作業言語かも分からず、中(広)東語および普通話・仏・英・伊・葡、それにウイグル語まで飛び交う多言語的、そしてクレオール的な環境こそ、なによりの相互人間学のフィールドだったのだ。

最初から不可能な営みであることを承知のうえで発足したこの相互人類学とは、もとより不断の試行錯誤の過程でしかない。安定したゲームの規則が定まったときには、この営みはずでにその使命を終えるはずなのだから、ひとは不可能な企画にとともに参画してはじめて真の友を得るものらしい。中山大学の蔡鴻生老師、胡守為先生や姜伯勤先生から、

筆者と同世代の王賓、劉文立に至るまで、また北京大学の湯一介・樂黛云夫妻、孟華夫人、郭宏安教授はじめとする方々、さらにはヨーロッパ側からの参加者として、中世史家ジャック・ル・ゴフ夫妻、マドリッド大学人類学教室のリソソントロサナ夫妻、コロンビア大学のフリオ・コロンボ夫妻、パリ・イタリア文化会館所長、オロ・ファツプリ夫妻、ローベール書店辞書編集長王幹アラン・レイ、パストール研究所の分子生物学者アントワニス・ダンジャン、写真家ジャン・ルイ・ランボー、そして、財団の学術委員長という以上に全体の取りまとめ役としてユーモア溢れる道化ぶりを発揮しつづけたウーベルト・エーコ、ボローニア大学教授とその愛すべきレナータ夫人。専門の蛸壺を離れ、無理を承知で真摯な対話に賭ける仲間と深夜まで腹藏なく語りあえたことは、何物にも代えがたい知的経験であった。

もとより財力にも組織力にも欠け、参加者の理解と善意だけで奇跡的に運営されてきた企画である。はたして「壁なき大学」が諸般からの財政援助を得て今後順調に発展するか、それとも文字どおり壁すら築かぬままに空中楼閣よろしく霧散・消滅するかは、まだ予断